稽中抄

全

へ 5
787

門 利 へ 4/6
号 787
冊 巻

宮内省図書印

歌はよむにも心ある事のうたがひやおぼつかなし
くはしくあきらむる事かなはずとも又なにか工夫し
給を何も難儀なる事に苦しく道のねがひやうを
覚悟し心よりおこる時は歌ならば万物の上に一つごく
家の宝に伝へやまことに宗祇法師の道者をはじめ人一たび
秘蔵に知し定家を出ぎりし代に望み見る
さのこと秘密伝にもあらば又何事もなし人にも見せまじき
もはらむかし一旦に奥儀は云伝へざるもの見つくらぬるに
世くだりて人の心もおろかなれば譲りつたはるといふとも
なくなりて事をかゝるなれば歌道の本意をうしなふ
と歌の道にも何ぶ傍やされども古来妙なる風体をもとめて
だうもまことにねてみをなしきらば世の為に難むなしく

月光ゆ[illegible]たくみに[illegible]梓る鏡の[illegible]
[illegible]試み寄一[illegible]
[illegible]
[illegible]

駒仕る御調
七夕 糸の名稱
七姫 の名 種
宮殿の 花園 まさかの糸
班傳の 御扇 うらの袋
秋仕 変化
侍告 の糸の章 糸の章
侍告仕 氣 日吉仕
菊仕 糸錦
赤稗 の袋
まて申 ふ事
宮殿のなてものの

駒仕る 御調
須摩の梅 糸
已 日仕 扇
須子 風 糸 御扇
須子の 種 毎
蔦の 文 扇仕 文
青義仕 ちくれ 白重
唐 袋 給 事
筑子 糸 事
撓 袋 ふ事
競 狩仕 事
花の 君の事

目次

四季のふうぶつ

四くさこうろ

順礼 石船さきの杭

海上食上事

くるま船乃事

秘中物語一

元日うやの盃

○元日うやのさうぶきは上月一の徳中そのさうぶきなりうやうて盃をつくりまさ入れ盃ようこう酒をのむ之是をうやの盃なつる

吉野の国畑人

○一昨の国畑人いふ芳野の天一つ一ケ所の

をなり諸国ちうを野の天人をてまつる和国野を

をなふ人なり取ふ九州筑後玉名郡まつ梨まるを

ら成をなりて人を玉畑 六年をなり 脇赤色なり

ちくこと国津ぶ乃をなりあまびをのそりてをなり

しなり日をりてまら鶴一をよりの河る君い

れさ野絵ひられば花かとくいき出ぐ風さなりなり尽も
野に脂布のりなん

梅の枝うゑる事

○むめの枝うゑるふる事は四月ちなりふこしのち
ちのくいんしゆなり三月ちるまを正月ちるま
○つるをなり是梅の枝に花をつくる事は日をを
のまつりをなり梅の枝をつくる事は日をを
ぎしてまひ始めこ花なぞこふ匂ひむめの枝
うゑふをつけ屋一毒の枝うゑふ植物に仕ぎ和名
○うゑふも毒の名なり花名花姫なりて大内に行ふ
まひ姫つ

柳枝の事

○うは元とふる事は四月七日なり大内に居茅つ
みをそなへ用たく枝を柳枝に柳つ
元とは柳のうこ(むこ)ひたつ枝のえご柳のえだ枝
○枝こは三つのえだを居るそなたてまつるなりされ
ば居茅の柳用なぞ云ふ柳枝つ事べし

元旦乃事

○きぬえぶりとふは正月初子に位ふ山神を
大内におつて給ふる是をきぬくぶりとなりされば是
を居ぎまひうれたる八幡宮上の三社うくを乃うる
まいれられたる八幡宮上きを上はもにけの御神を
是踏らうる是をしに居ぎより社ちきき
うか神をまいら踏ぐ是たりそ是を来ちけて恨を

之姫宮の殿にうらみ奉ら[illegible]
時あるべしとて殿ものこりしを[illegible]
物語ぞ大内の殿にあり[illegible]
給へ姫宮のうらみ奉ら[illegible]
[illegible]
めの琴をひき物語[illegible]
聞しめして　三[illegible]

四本の花　歌

○春は梅の香、夏は郭公の音、秋は萩の下露
は雪の花の水鳥　四季は八月の月しは
○四季は風の音　時雨　うきぬ　百千鳥　八月十五夜

六雀　雁の雁　二見の浦の
沈ぬ　八橋　[illegible]
なぶの里　[illegible]
されば　[illegible]
宝　御供　[illegible]
葉ひろ　[illegible]
[illegible]
[illegible]

雪くれなゐの玉のうてなは
まこと花のえにしあるべしとかや
まづの花のたとへも侯申（まね
家集 家の花のえにも成まうり
雅平の梅の歌
八重櫻乃事
○八重櫻のを世に聖武天皇まのこゝにさくらをうゑ給ひ
けるとかの三笠山に八重櫻あり其さくらを見給ひて御
門文殊菩薩の御許へ
日ゝ
（て巡まてすきされる山櫻
いもとゝ思ふやうにさくらかれ
御花いとゞかゝる歌を詠給ひ
さくらの御ゝを見付せまゐらせ給ひて御ゝを
あ見付れば其時皇后さくらの御ゝ
さかりなる枝をおりて見せ給ひ
八重櫻のさくらの御ゝ
ゝゝ之さを論ふ上代より
されば一條院の御時八重櫻を
ゝりて手紙を添へて奇よあそばされ
いとしのゝ
詠花
ゝ
九重の櫻
○九重のさくらのことゝ
あれ八梅なるゝ
植さ物ら

春を樹をのらたあらそふ友の鶯なほ老も命を
うつし給ひぎりしきれとも梅年の大夫の宅なるまとも

吉野の桜　田　梁

○よしの、極田さんは春の極をそなへ　二月極田の春を
さくらさくふこと桜がりハ桜　堂　桜田とたれハ春と　より
野をうつうつ行く紀のまとり植ハ桜、うつぼりさくふ
きずの春なと　春と

丁亥　三芳野の山のうつ雪消ゆる
春しるしのまとの一川春也（ば

鶯　乃　春の花

○鶯の春くきハ春とつまのむしなる枝　本の枝　まとし初
くそもずの春よりじくはほとぎすのまふけ

鶯と時雨とは必ず中をたがふと行りて鶯ハ時雨と
○かくれきまうる枝時鳥ハもずの枝をもうて野山の春の春
をとけてなきとたること時雨ハもずのまふけの春の春を
てくること春の堂とふ句のまふけの春も立るくる
もつけ鶯

丁亥　志のぶとも事ハ絶しなり時雨
鶯の春の堂　立春のまとの

源　子　の　春　菊

○源子のうらる梅と菊をけるとは行平中納言の御妻
源子の理山の梅と菊をこ（絵ひるるや行平ハ
源ぎりさ切る源子の風なるうまれてうきめを見
絵ふ行平も三と野がはを源子の住給ふ梅と菊

源平あらそひ行平の時なりしかばこれ源平の梅郷の
ふるを源氏ながらおのの吾妻や
去れば源平の山里時しらで　行平
散うゆ一き梅ゆ有ける
千里をもとしきそいはぬ松毎ゆ　白
菊植て見る源平の庵人
源平の磯狩　そもそも平の生涯の野山ゆ人ゆ磯
狩をあるこまひ〳〵源平の磯狩の磯ゆ磯狩の
ゆつゝみの磯狩源平ゆ人ゆ磯ゆ磯ゆ
巳　日　の　桜
○巳日の桜八三月三日ゆ人梅平ゆ人ゆ
（て鬼神ゆ行ひたゆ）ふゆ人ゆ桜ゆ者海陸の御宝

山ゆ人ゆ桜ゆ霞ゆ
源平　風　桜
○源平の風俗去る源氏紀ゆ三月半ゆ源平ゆ
風ゆ死の散ゆ者あはれゆ名ゆて風ゆ桜ゆ行ゆ
きれ風ゆ人ゆ桜ゆ平ゆ源平ゆ平ゆ源氏ゆ
また大江桜ゆ源ゆ
（源平の風桜ゆ者ゆ風ゆ大江桜ゆ
去桜ゆ行ふ源平ゆ
源平の桜　母
○去母のうらの桜母ゆ源氏郷ゆ定川の母ゆ
めされ源平の国ゆ下り桜ゆ国平の桜ゆ者ゆ
ゆや　去ゆ桜ゆ　戸上人のゆ

り給ふとき大臣なげるやうに葉室の山路あるに源氏
なるべしとふまぎれ給へはまことの鶯なるものゝ
ものゝ音にてなつかしきなれはやはり源氏を
やはり此はれるや源氏の御子の御子孫の侍所をを
とゝのへ給ひ給へる　三月廿九日

さくら散る頃の風をうらみて
源氏の上の御子孫

猿の文

○さるの文ふはむかし弘法大師なりしなり
唐のもろこしの国にあるる文ものの紙を
一ふるまれ給へ（てをくるもの）とも（なめの文ともまき
使ものゝ）其所歌の事歌の中に源氏を書

書給ふ事のうりをあるべしなりうれば文の上と
ふ句のあをそくるなりさて猿の文とふも
昔さやうけんそひし仙人のうた（猿の詩を返りしを行
其を木の文の文ともふるるの詩をけくるを詩
とや

さるの事　さるうり

○あをそのをたれ乃六大内をして四月百南のうぐる
のう柳そて二月のうを相撲を生ことるまるをのをたれを
うを弱ひ生ることのをるるまるをのをたれ　さるだれ及柳
大切の事　ふたりふるい　ふたり　天上人は四月一日よ
りふ初まぬさのかをさたるふ　又は四月一日よ
九か一もゆ　又は

あふぎを給ふ事

○四月一日見もかはりてそらより殿上人へあふぎを給ふ事

給ふ事

○ほくまゝ四月五日ほくまゝを江國に放れ

濃きふを旦妻といふ和名抄に真名抄の神をまた鍋をうづ合見陸

懐梅きもんかねる神の方便なり むかしの鍋の取つち

左べをちさくつくりて取つてかづく今の大鍋をひ

とつゝらちいさきを才文れを見えぬ孫まもるを

ふ

おがつうな鍋子の神の事あなたバ

以ふか鍋の数へ記 歌

鏡をねる事

○ちゝ見を祝ふといふ事は鏡をゝを祝ふ事なり唐

ゝ八五月の事る鏡を祝ふ鬼のかたちをつくりむろ八

せてまつるなり 赤数まつるなり

競守の事

○ちゝひのりは五月の事るゝ事の事を菜ゝ

とゝ祝物へ

君ゝ為に山をゝ ちゝひのり

なへていく世の菜なりゝ

花の君 花の事

○花の君は杜若をいふ むかし五月五日菖蒲

○ぶんぢの時三河の八橋まうでしける六郎社名
なみだれてさも優なる人けぶり社名を花の名と
仰て一首の歌をよみ侍る

かよりきぬ花の名もなれ一夜なれ　業平

水宝社　和漢

○水宝社藤沢ハ六月一日　帝　御きこしめ社人む
す一富士より　御ようひもろまつりる　延喜のみ
すゞより式うゝ冊陸の板田山より八ばあぶる　見ハ百
士より　賜れ　黄金ひもろふ白　雅楽つけ侍
水宝宮　いとう　宮ゝの朝　こうも
板田の山のちはやかるく

七夕　祭　天の名神

○七夕をまつる儀式のとき大宝殿中ニ八百の器をそなへて
糸文ゝ織る織一つゝを結ゝ其上ニ板の葉ニ酒を
うゝ者て其上ニ菓物を盛る殿ニ　半則七夕ニ
供ぜる菓物ハ宮殿　焼物六種ゝ　鏡たゝの水を
百ニ池ゝふ黄金　居ゝ　ゝ　水ゝ
七夕の事　枕　そゝ　ゝ
つゝを誤なり　ゝ　ゝ　ゝ
し天の名神　七夕ニ　ゝ
車ニつゝて　ゝ　ゝ　ゝ
舟ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ふハゝて　天の名神　ゝ

[illegible] 七夕 乃もと

七姫 四名 七種

○七夕の名所

「きこうの姫」 「菖姫」 「百子姫」 「神の子姫」 「織姫」

「棚倉姫」 「横姫」

[illegible]て七姫といふ 又仕方七種の花花

結びて七種をなれば[illegible]花 [illegible]仕方七種をなれば

別に七の[illegible]ら物を大内[illegible]八千向流[illegible]七種 植

物の七種

「あきの日」 「萩」 「め郎花」 「桔梗」 「ら」 「なでしこ」

「くず」

つゝ流乃花園 [illegible]の所

○宮殿の花園といふは 深ぎの[illegible]時もしく[illegible]七夕のまつり

のおよ[illegible]の[illegible]花と[illegible]植 植給ひて七夕[illegible]

[illegible]宮殿の花園 [illegible]花園 [illegible]

つゝ[illegible]星[illegible]植 [illegible]

[illegible]七[illegible]五[illegible]七[illegible] 二[illegible]の[illegible]

おまひ[illegible]

くゝ[illegible]

雜花

○雜花の御殿といふは 深ぎの[illegible]雜花[illegible]月の[illegible]

各月の花 [illegible]雜花[illegible]

[illegible]月の[illegible]

[illegible]月雜花の御殿 [illegible]

[illegible]より旅へ立て殺ひて後うつらの里
る住吉ひろまや七月七日七夕の時家々をきよめ殺して
あのうるさきをきらへ殺へりうつらの西殺七月吉
七夕のうつらの西殺もまつ[illegible]（[illegible]）

秋乃更　た

○秋乃更なとふ八月一日の事ニ天上人なと社会をて
結ひまわたを重て暑殺ふ日を秋の更なとゝ申

住吉乃　長つ家

○住吉長家のと住吉ハ印本をいふとゝ[illegible]ものなた
長家は豊子をつふをもつて見を植れハうき上
ひをとゝ思家は寸家花をいふをゝ[illegible]ふ家を思
のあこをもつて[illegible]ひ殺て[illegible]

うら殺をもつ[illegible]く殺きて市子殺の墓へまつる
忘おやを祈ふをの切なるを殺きて長家を植たり
実狂ひをれまゝきとて[illegible]ぶ家をう（たり乙卯の
ふらぐしハ[illegible]）[illegible]ら無る中人まいりたる墓へもまい
後を守ることふをうまれて思の志こをもつて
また家神天皇をゝ[illegible]行事ひをを物ゆゑ殺ふ
を長家をゝ（が植[illegible]）

狂ひ殺ひ

[illegible]殺をひつ[illegible]殺をれと
木綿花
思の志こをもつて[illegible]

住吉　菊

○ 春ごとに咲く菊をまもりし住吉の松ぞあはれなりける

ゆふ松の花たちかへる春の色を時雨の松にうつすなりけり

ふる雨に松はいとゞ色まさりて春をまちえぬ菊をなげかん

して秋をまつ

住吉の岸の菊ぞうつりける

菊の露の花もきこのすん

○ たちまちて菊の花咲かれと

住吉の浦の海人のしるしの濱菊年

同 吳 名

○ 秋の花 花ちる前 山路の菊 秋ちる

菊の露

つゆ露はかぎりつる時をしるすまこと

露ぞ秋しるき秋の花かも

秋ちれをおしむもらぬ山路

花の前ふる 行人 ゆふ

春ふる文ふる菊の葉も枯ぬと

理陽しかる菊の花うれ

菊れ 吳 綿

○ 菊はきせいこゝろは七月のすゑ菊のいたをうせて

九月九日 玉をきせて 大國 うぎ まつりゐ

玉御のうたと 月 綿 きすると別ならば花をとく

さうもんがわと

秋はれるかのふかのうたのれば

菊のきわたりをもつむ

赤椿の油

○ゑびの油をゑふは大きなる人の髪ふかるゝのめのり
ゝあぶ男を持たりしがきらゝまゝけなど世人
しきもてなしもあらてとのゑもなりうゝあり
るはゝゑふきびなしゞ御物なしまつのめはき
びの飯をまてなしまこと油をゑふしそける
ゝあゝゝなり見きびの油をゑいあなり中密の
まゝけの髪なゞつゝ油をつけゝし御きびの油
生敷をゑはなしてゝしまゝ

をゝゆふ事

○をゝゆふ秋の事ゝ御ゝゝる本なり油まめなど山
里ゝらくゝる本うゝなり

○ゑふ油のなゝ中の

○ゑふ油のなゝものゝ油ゝの御ゝは御更をゝまゝ生長ゝ三
の宝ゝゝゝ

なでしこ付撫し

ぬきの海のうちつ波のなてしこハ
見れども〳〵面白の小野

同上

○めきの国一本のをよろつのうるはしふとゝでも出ハ風吹
水鏡、花、月、紅葉まこハさびしきを面なで
をもしろくめきの国一本をうつふひらゝつゝ来む（うつ）
須戸うらうて嵐風を思ふを
さなぐなふ時のをとゝ来る源氏の里
めきの国一本のの山のうしろ一本行平
四季はふちはら国
○東八嵐、夜八薫、秋八藤、見を四季

うふすはこうあるこ
四くこうけ祭
○四くこうけ祭りは春夏秋冬の四回、祭をとゝ
こをいふなり山祭なくまつり時たけハなごのきるゝ
小東うないたゝ武国のゆゝしでを付て相撲ちごの
（なごのきるゝ）東西ゝ名紀たゝ鈴の四回を付て
源氏立国（なごのきるゝ）ちてをはるが四（ゝ）付ち
ちいふ〳〵

あふ坂夕つけちゝ四ちゝそ
君かゐ東をなくもゝめ
明石は石船ちゝ一の云
○あうしの石船ちゝふ源氏物語（うつゝ物語）

ひと一とせ野のうへ住給いける頃源ぎの大納言
殿あまの人をかしらられけるに不なるのあまが船をつくけ
るそと向陸奥国を網をさしたる時此石をおとろかす
所より中なるべき所より石船ひとを
網をさしたるとそふかの石船はけて源ぎの
中の合へまくこと所の所とふ所の長人居
の御殿の塚のうへ柳しなをたるの松をはいひけ
たり

昔をつたへきかまほしく独れ月
あらしの松の風の宮もやう
海の合れる事
つらつらの海をは人のもとる合をたなし海のおもをのく

もりものゝひきうゑたりたる松なる所源ぎ殿下まて
海の底といふとこうをれやらあなをゝ高き底
つゆ所

所広のおの浦の月のうゑまて雲ふ松ハ
海のあまもひきこふてる

車船の事

○車船といふ兵庫の国加田の御崎をのをゝ
ををの御崎ハ長陸の崎をゝ他国崎ゝ
をゝぎめぐりまたのきまわる船なれハ車船といふ
こ

めくり来ぬつたの海の車船
くるしき船の少数もして

祝申抜書二　目録

宗祇抜

うや姫　つれなき池

二もし宮の宮

あきハ月　神

大都　京都　白和都　住吉の玉

日和の吳　住吉の玉

冨士の人　遠うの

ちちの　舞　大和舞

おもしろ二の　ちちの

ちちの　摺　うまの　ちちの

ちちの　摺　祝ふもの

形見の　沢　命乃水　今の水

行水のうちとく
東琴の事
小野の一松枝なりたちなりたちの好
松尾の事
三尾の事
和泉の事
吉野の事
鶴の事
こうこうの鶴の事
三社燈の事
淀の夫はの事

初瀬の海士か船
初瀬の海士の釣舟 初瀬
海の海士の釣舟 初瀬
海の海士の釣舟 初瀬
海

書き の図 八十七律
うみ 風 七言絶句

秘中抄 巻二

かや姫 つきまの池

○かや姫とは 天照大神宮 伊勢国 伊勢宮
冊子中に神路の父母なり其時のかや姫をうみ姫と
又契るとゝふ句より姫をうみ姫も一部
つれまの池のとゝ伊勢おなじ おの池
月とは光つれまの池の
沼神 沼者之なハ家なりと知れ
是一切衆生 悪業煩悩 まぶらをまぶまて
ちぎきよくなり
池 書住まぶる
二 しらの 宮

○二をし羅の宮　常則　神明の社事　此宮は二柱と
て二ぬをとなりにつゝ　是は子を中さもの　これは子を中
に　まゝ母　ゆきをしたがへ　男子　女子　中ぞくなり　二まをしらを中　夫婦の神を
まをしまをす　御神体　一枝の形をまをす　神をし
あをは　の神
○この五の神を　の神をふ　こうはをふ　五の
神をまつる時の　赤飯をふ　ちはぬく　生うら
より　人形　立物の形なり
　　途中　あをの神のこしは立
　　行末は　帰るまをす
大　　まわの帰
　　白わの帰

○大帰とは　神に奉の　芋をなぐつけををいふ
あれこれの　をふる　物　芋　川にながしたる
ゝりをうをうをして　手路物語　はぬの引あま
ををなるぬれをを　ひをる　物をもい
てりまこまわ帰　白わ帰を　青は　をかゝをり白
はををのこをる　二本　ををる　用品　帰をまぎをと
をは　左の　をを　をまつる　日　ぎををいふことを
立　音相通　なれば
　　日本の　名　つゝ　をを
○冠乃玉　やまを玉　「ゝつぶの玉　そうだらの玉　わの
こゝの玉　とよ　「ゝの玉　「ゝまひおの玉　伝ゝまひ玉
まこつゝの玉　九州の　つゝ　をを　をもつふ　をを

ほくしゅ人のきゑ五ぎまつさきは尽て遠くそゝ名な
しでハ住ぎりしく見九ケ嶋なぎら如ゆうゆうしく
人のまゝて海日本の四方なるゝ山はみつく名
くゝまろく

富士山は名

○うぐら山　ちかなり山　綾山　三重山　明石山　四方
ちる山　綾毛山　栗山　なゝ濱山　をゝめご山　こけそう
山　そ星の山　重は源山　長上　十三ゝ
道う嶋ゝは　全江は好き貴　尾張はつつた　筑紫
ちぢの島　そゝをゝて　ふ　さ星なぎら　淡路　佐渡
すゝが　舞　やまゝ舞
○きゝが舞ゝふを　見ハ　ゝ　梅の宿　うぢの濱ゝい

ふ沈ゝあま人　沼してありしくらしゝ沼ゝ沼ゝくしき
世人　ゝ　ゝて　宿をかりぬゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ハ年沼ゝゆゝ　沼女人　はあま人の家ゝ月日を　ゝ
ゝまゝ　ゝ婦ゝなゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　立ゝまが好　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
富士ゝてあひし　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
日ゝゝて二たびゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
りあゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
りあま人　名ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

[illegible]が舞ふ[illegible]女人ハ[illegible]ハ[illegible]て
[illegible]ハ[illegible]も[illegible]集りて日[illegible]二[illegible]生れ[illegible]ひて
[illegible]天人の[illegible]裏に行[illegible]ハ天宮
[illegible]望[illegible]ましく[illegible]雪[illegible]ハ[illegible]
いぢ[illegible]も[illegible]行[illegible]の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]の[illegible]黒天人の[illegible]ハ[illegible]天[illegible]
[illegible]ハ天人の[illegible]ハ[illegible]天[illegible]
[illegible]も[illegible]舞の[illegible]ハ[illegible]の[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

○神[illegible]ハ[illegible]人[illegible]東[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

○[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]
[illegible]
[illegible]

ゝしと云ふは山帶をうゝりまことのいむそなりもふよ
山帶をそめりまいくしかいうをむと云ふは具敷を結び
てうゝしうを巻巻巻かきて上代は男女の契
をおもひてうまたのをそをきまこと巻はうゝつぎ
て山の歌をやうなゝしゝ

そうなき

○空なきといふとは雨うし手伝ふ人赤巻まなきこるう
たちを見せんそ祝の水を巻ゝ目まはて手風時を見
ゝるある時山女は山のそらなれあらさんそ祝はゝ
星をすりて天ゝりを巻ゝりていはるものどく泣水
をそりて泣ゝる部をゝ見野ゝる魚ゝ時なずれゝう
泣中ゝうそらなれと云ふ句る祝は水とつゝる

赤ゝそ了紀人は見紀そも
人ゝそゝつゝ新のゝしきよ

形見乃水　命は水　命の水

○ゝそゝそれ水とふはむゝしなるひら鞠る一まふで
紙ひ形ゝ下向し殆ハむとしゝる布名流なる女
ゝあひ殆ひける見ゝいつゝしき事ふ海ゝ巻
も乃ぶ女ゝ巻巻ゝ立ゝ巻殆ひていうなる人
みゝかまゝまゝゝゝは山海ゝひゝりいゝゝ野殆ふ
ゝゝと殆殆ひければ紀女ゝ作ゝ巻ハ系紀のゝまゝて
ふしゝゝゝ巻ゝ巻ゝ巻

うちつれて女共あまた出で、野
辺に花をもとめ、草葉に露を
ながめ、うれしくもあるかな、
者とひつ目まゐりゆくも、やがて鬼の子どもなる孫ふ
便を相手にいとかしこくおもひまいらせ、さまなどもを
まで年をとり、前世の契りなどやいかなる
が孫を忘れぬ程にまたまたこの孫
ゐ所をかしなるまゐり野辺にて山水
乱れをあしづ、程なくまゐり
て思の外知人野辺にて居比丘尼孫
に業平の家紀姫の人々をうつしいだくるなる
紀貫之の行幸ふるこゝろおもひのおなじ

裏に入紙ひろうきなるまゝ
絵ひ人色に其時女
山郭はぎひそかるおいす
契をおば
おそろしくうれしくなりて
をなし紙ひろを
さまは貴命孫の
人まで契り孫ひ
の水つくるとなん
見の孫は便
くまゝ

せきとめる別の巻行孫も

うくこゝのかぞ神のこれる　業平

まこと命の水は玉まこと滅の水はなぶ人の命なるべう

つりおろゆくを取るとて詠ふる

いつまでも二つぬ身こそうなゐ道

金はあるのなりれひろまは

まこと人のあ玉まこうつりやまき人の石をはる玉

とてふる

閑ハ御る嫌なくかるる秋ちり

人の心は水そなるのうゝ

行水ようぞらくを

○行水ようぞらくといふむりし　聖武天皇乃西門

ヨあるもの女を意ひいれハ御女いふやうハあるもの

きうきつけて見よそれが水ようぞ見へ侍ぶなび

あんとひしまと山雪水の音ようあるもの

をういて見ぬ雪ぬ音ようぶて御男ハ知なく

八水して来るるまなりて御の子

さまをなりて

天のつらきハ侍のもなく

東　琴の事

○まこと琴琴ハ琴ハ東つらハかひく琴と見も

むのひろく水ハ侍のもなく

琴のつらをしてひきしと

小野　一枝　なるの寺

○小野の一枝枝と見ハ小野の天神いまこれ

安楽寺にて亦いつまを天神なりて起一のかりて
人まうらとまなきと日本の諸神の祈ひらく
永久　伊勢大神宮神を祈まり永久不絶一枝
の本枝を植て賀び祈はぐ永不絶就中
と祈り祈ひらく其方しけりて一夜よ中の雲
をいう去程に安楽寺に其場無けりてやすで
神をまり祈ひて中よりけりて一枝の枝をは仕
中の枝枝にふと拙枝を新て足祈ほ九九九九
けりて一本賀び天神名職と云の一て
柳を一本うえ祈ひけるやうなりなりされ
ば一枝の枝ならなりなる柳一本なりの一枝の枝枝
のとなりまでさ柳も生ぬし新日吉小

天神まで人間にて拙一生一生時中生行りし
寺なり小姓まつ中賀
なりがし寺小姓まの行り原ぎこの寺なり西ぬづら
ちし生まる住給ひし原ぎこの姫まてまちと
むりづら生まるて拙こうまちり ふるひやう拙
ちたまひるるや拙ふるひやこをつらはやこうり
名京こう句まなるぬ寺つ弟しなるぬ
まる ひるまの子つけ屋しむりづらひ祈ひこ
句の神の日ふこう拙ひなぬつけ屋 又なるぬ
寺こうまの石山寺をもふ西てこうり屋き
人の こうまをいはまもこう
五月句やこうまれ山れうち猫

なまのし寺れ事すこそさ節
なまのしの望けとハ大峰れこそ

都島乃事

○都島とふを角田川のほとりにいつくしき宮な
れバとて祀るをいふ又ハ船をいふ祇園
天王の宮をいふ又まことにかの宮は神
都島は神殿をうくるとて其外のつらく
しき事を出雲殿れこそ事をいふ
あふぐなり云れ上なる都島
さいこくて代をそ宮殿
出雲れ乃事
○なでしこ花を夢をつ節をと大きなるなでし

こそ植物の種なでしこの来てあそぶ所の
り花を夢をふる実れ石はしるるを
中に白雪なるされバうんさいも筆眠乃行
をふるなり
香をしき事や祭りて乃行
都島れ事
○都島の事を庫ことを植物を行る
大和川あれくつるる都島
人れ事れこそ神ひとるる
神も事るる立田れ山の都島
ぬれくつるる大和川
れ神の延寿の事

○さげの滝をさもくさのそと

都のまり紅の山ゑこゑや

よまきこうそ屋のすけの滝雪

社頭　世事

○社頭をとむらのとゝまこ社頭ゆふ

海ゆきいなるの上は社頭もし

雪ろうおそら西頭つうひをゝよ

社頭をの空ゝゝゝゝ吐ゝもも

雪ゆうまゝ頭ゆるつなをこゝなれ

ゝしきゝ雪ゆ事

○ゝきゝ二雪ゆう京は中立をもふまこ海は

雪ゝゝゆう人ゝゝゝは雪なり

○雪鐘をつくるとゝは大臣関の西ゝ山ゝ行ゆ法山

ゝ鐘ゆうつけどもたゝこゝゝゝ鐘ゝは見なり

冬の雪之

秋をうけてこゝゝ鐘か知山嵐

ゝ　ゝ　燈は　ゝ　事

○三社燈は秋をゝ行ゆゝゝ大明神ゝ三くゝらの

むゝうゝまれたゝ彼明神の御歌

ゝたなのゝ人のおゝひをゝらたゝを

うきを　ゝゝ　三　ゝ　灯

淀　ゝ　志ゝ　ゝ

○淀ゝ志ゝ川ゝ岸ゝ行ゆ志ゝ世風ゝ志ゝ見ゝてゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

初瀬ぢより　初瀬女

○初瀬ぢより六里八町の所　むうづ寺の年九およ
か　ゑへ　おとり行て　こおのとる　仏神を　彩り　絵ひて　初瀬
きま　二夜　ちり　絵ひ　ゑ　やれば　初瀬　といふ　句な
せ　ちり　つけ　こ　八　はむ　蔦の　言づて　絵（ま
り　絵ひ　ほど　なる　の　絵る　中　初り　絵ひ　なり　され
ば　ゑ　絵る　中　初り　絵ひ　つけ　こ　ぞ　ゑ　絵き　こ　なり　の　ゑ　か
へ　ま　こ　初瀬　女　こ　ふ　こ　と　ゑ　八　初瀬　の　山　絵　の　ゑ　こ
山　ぐ　こ　へ　寅　れ　せ　こ　て　八　な　し

古歌

女　つ　絵　女　の　う　ち　こ　れ　る　み　の　な　ら　絵　る　ま　な
柳　の　ゑ　も　絵　る　ま　こ　け　こ　ま　き

つ　ら　初　絵　女　中

○はつ初瀬六里九町の所　むうづ寺の年九およ
こけてゑこれ白絵をこ　ふ　こ　ま　こ　八　女　女　ま　こ　こ　ま　あ
ま　こ　ま　こ　ふ　こ　ま　こ　ま　こ　つ　う　絵　た　こ　絵　の　か　こ

初　義経の　箱

○初瀬の箱　こ　ふ　八　ひ　え　の　山　中　絵　た　こ　ま　こ　的
こ　ま　方　絵　ま　ま　る　ひ　や　こ　こ　る　絵　こ　人　絵　ひ　て　日
枝の山　こ　う　づ　こ　ま　ひ　け　こ　そ　れ　こ　ま　る　日　ま　ま　る　中　絵　醒
日　こ　け　ま　こ　絵　こ　ま　初　義　の　絵　こ　ま　ま　る　今　こ　り　枝　の
山　こ　ま　り　更　こ　人　こ　ま　ま　ま　こ　こ　ま　こ　ま　こ　絵　た　こ　絵　な
れ　ば　こ　て　初　義　の　絵　こ　ま　ま　る　ま　ま　こ　ま　こ　ま　こ

近江　江　絵　初　こ　行　の　つ　な　き　田　こ　め　て　こ　こ　こ　事

○こ　こ　八　初　こ　山　月　こ　ま　こ　ま　こ　出　を　つ　な　ぎ　こ　め　て　田　を　つ　こ　り　ゆ　こ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

万歌もかなしまるゝ後生

猪の死の事

○ゐの神のたゝりを誠の死ゐなし　もしあまりうるさ
たる時は遠山の猪はなれ都もうるさ事ゆるるう
ゐのかなあれハ云

よまうとわまこ大山の谷底八
猪の死きゝ書のり　行

鳥　羽　も　事

○うむ　むは鳥羽のむと事　むりしはまるやこゝかゝ
すゝて五尺ゐる猪はれ羽みちるむをもて殺をて
らしたるゆるゝ
いとまあて立ゝ時ハうゐもれ

神はたゝりしてゐ　ぬゐ

主　神の事

○真神八雨の神の事

雑　つゝの毛はゆるゝけて生ゝまれ
風上は言ハれゐるやゝれ　雨降

たまゆふの事

○大国ゆふハ大ゐ成ゝ他ゐゝゝをきりて一げ八初
里ゐのやうもゝ　ゝく主ともなくかさなりたゝ　元ゝて
けしゝゝ文を書て　のゝこ一やま五事ゝ殺ハゝれ
ゝゝし生る文ゝ　ゝきゝの文を事て枕れ下るを
けバ事ゝ元ゝゝ　ゝ　ゝ　ゝ

除しまとう事

○めつらしきことゝふ詞ハ神功皇后先皇の御身ゝ
したゞひ給ひて崩ましましを御ものの
箱崎宮の向ひ給ふる沖前に打寄せ給ひて
針をうゞめて釣をしたまへ赤西に宝玉ある時
しを水ゝなけ入て御をとゝ給ひ給ふは新
きなりと針をゝめて乃浦ひて御をひげ給ふは新
ふる角を沖に投てめづらしきものなりとて手にを
取しと名付給ふ仍て名付給ふ所のきもはこの
鉛を男のつるゝ所つられたりやまとめ給ふ名
号と詞書集ゝ入るめつらしとふ詞を略
めつらしと歌ゝもあるゝ

式載　めつらしきことゆきをこゝ海の神なゝふ　資業
たゝるゝ出雲なるゝ

甲斐

○甲斐なきことゝふ所ハ石上中納言の京の
もたるこゝろを見まして給ふ時ハ合せんとふ所ゝ
石上侍従殿ハ殺せども子昇見ふものゝ
しまる巣をきゝれもなし山の貝なのゝ
とゝひしゝ所ゝ
すこしうれしきまゝ見ゝ
事の合ゝ

豊世の國　八幡の神

○そこよの國とは筑宮社を書給ふ　つけ

まこと海面をもつけ給へ　とこよの国に出給ふ所の
神をもつけ給へ　玉津島の神に沈給ふ　まこと
八百の神　そは大海をのる神に先ひらく
の神に大海をもつ給ふ　海を守り給ふ神にそもつ給ふ
四神一体の御神をまもる　うちひの玉にそなへ
ふかつけ給へ　又ちはやひの神代に天降ひける
神に八幡の御妹宮を姫宮に　是海の中に宮を
給ひてそれ海の神をつまとして此玉を
五一給いけるみちひの玉にまも神沈給い
けれもく事合まりとこよの玉のつちひとふかる

もこれの宮をもつまとしはむとれの姫の住
給ふところに九州豊国ところに沈給
後世を行る所いそこの神は天満宮なり
そもそもこの神の御事
　　　

[illegible]ハ加はりて其人そ[illegible]ハ見の[illegible]をうるまて[illegible]
見はかりをし給へ[illegible]ある時小野井の[illegible]
て[illegible]針を[illegible]
ひて[illegible]針を[illegible]
のまてねくてあ[illegible]
[illegible]
のまて[illegible]
[illegible]
[illegible]

祕中抄第三目録

名所詠合の事　宗祇撰

張儀乃詞

賦乃書様

賦乃取様

祝中物中三

名所法合の歌

○雜部女なつやすきうとなりなるまがしれる雜部つけ歌し

雜部女があまうし義和樣の日まくれらる秋の月も

○雜部女八芦鶴みさこう雲雀

伊勢物語

ほくばこ、芦野の既、日暮、既山樣に　和さら

ま記一ちたうたいれ、

入相丸雜部の山風

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

れば石河とたいなるたい嶽

○李庸は國之八郡を兵部卿王子國平もと拾は
國之八郡を兵部卿王子國平もと拾は
李庸は國之八郡を兵部卿王子國平もと拾は

○嵐山より西はさくらの山なり
の河内より西はさくらの山なり
植樹山なり植樹山なり
紅葉山より紅葉山なり

嵐山より紅葉山なり

○山川水

世話も仝じ

○[illegible]　文字　赤字が[illegible]　赤字が[illegible]

八[illegible]川　文字は[illegible]

○うおのこなる[illegible]　芳野川の[illegible]

○柳はうわ[illegible]　文字は[illegible]　[illegible]

○菊はなぐも[illegible]　柳はうらつけ[illegible]　[illegible]

菊は[illegible]　柳はうらつけ[illegible]

○芦原は里　[illegible]前[illegible]

○えび[illegible]　明石[illegible]

○なる[illegible]浦[illegible]

[illegible]

○里はあま　[illegible]

○水[illegible]

[illegible]

○水[illegible]

なる[illegible]　浦[illegible]

○浦は[illegible]

山の[illegible]

○神[illegible]

○なごの浦　なごの海　名所
　　なごの海に月はふる雪は
　　ゆきはしぬて消えうせもする
○ちりぬ浦つゝ　同名所　名の雪
　　のつまりゝ時は風し強山
　　なく山もなきひきこゑもなくて
　　ちりぬ浦　ゆきはふる　名所
○ゆきぬちりぬ　大和の名所
○うぐひすの浦　なく山ほと
○くゝのゆの小鹿　冊陽の名所
○あさゝの小鹿　きゝすゝ
○あまの河　河の名　大和名所

○ちはらひの小野　うゐの名　名所
○十市のさと　大和
○乃ち野の山をあをぬも云　うまの絵の色
○村雲の里　冊陽名所
○ふきもの里　摂津　なにはへ
○ひゝらゝの里　同名　大和　吉野　ひ日
○高砂　摂津
○なでしこ　この家　大和
○野の露　やまと
○ほゝゑむ　山名　摂津　まこゝろ　つゝば山　ゆゑ　名所
○冊陽の天　ゆゑ　伊勢　まこゝ　ゆの天のもゝ
　　名所ひける　天　ゆゑ　みその　冊陽の四　野を　都

清水て神ゐの法をとりて[illegible]
[illegible]の文殊へ灯あげる 伊勢の神宮のおそらく
ひと[illegible]姫[illegible]
より灯をまいらせ

○西京は暁の天名 清れ綱そ八なし 三月八日の歌も
夕月夜おがつうなくとうと まこと二見のうらる
月日物なれば おかつうなくとうと
西京つまと 大事の注こと 初て

夕月夜おがつうなくも 西京
二見は庵はあけてうとうれ
むすしけ二見の庵のいとけと
今集 前給る 四[illegible]物は 村こと 清水

○暑葉山とは 暑葉山は[illegible] 植物[illegible]
[illegible]

○陸奥のうしまの[illegible]
だれ人[illegible]
はなる[illegible]

万集 常陸なるあひろる[illegible]山越て
[illegible]

○さわらたまくこそつけて きいうも

[illegible]

○うしまは 伊[illegible]島

○うしまは 伊[illegible]島

[illegible]

○[illegible]

○雑俳 明石 [illegible]

○油の山[illegible]

○吉野[illegible] 名所[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○紅葉の山 [illegible]

雑 識 乃 部

○さいこうまたはつこうぶとゝふ草花名 又草のちいさく

扇也[illegible]

さいこうまたはつこうぶ 内芳院の

春 [illegible]

○鈴蘭 [illegible]

[illegible]

○孔雀草 [illegible]

○梅の実 [illegible]

○[illegible]

[illegible]

○たばの葉おぎの葉 冬枯の葉 夏枯の葉 春枯

○いまの唐春 唐春

○さのかこの花 春花 冬花 夏花 秋花

○春花 秋のさらしき八 春花

○春花 秋のこらしき八 春花

○四つぎき八 春花 桜きの(も 春花)ら 桜は 雜

○六〇花 春 つゝじ

新六 海はさ

○山ちは なく八 春花 山ちは 春花なぐ八 春花

○花ぐ 春 みとは 花なも(むらぎれ 事)

○山梅 戸は 梅の 弟 春 戸をこゝろぐ なく 秋ら

○春風 なつのあらしの 夏 四月 春 有の 梅 春

○山くらも 牡丹 春 又 釈日 桜 ゆ ゆ なぐ まこ

名ら 春 ゆ 桜 四日 名 春 四月 春 梅 ゆ

春

○卯月の雪とは 卯月 花の 春 花 卯月 花 ゆ

○春 花 春 ゆ れ 春 春 ゆ れ ぐ ゆ 春 春 ぐ 春

ぬ名をうふ ゆ

○水の花 ゆ ゆ 春 春 又八 桜 ゆ 春 ゆ

卯花 乃 卯 ゆ ゆ なゆ ゆ ゆ 六月 春

○夕 歌の雪 花 ゆ 事 六月

○さゝら 麻 あさの 麻 義 六月

○ゆ ゆ 春 ゆ 春 春 花 六月

○去年京にて書はじめ

紅葉たのもしかるべき樹まきそ

卯月の月うるハ去年京

○書はじめ六月に書はじめ姓風もさし

和国まる書はじめ姓風そめて

末木

山郎左衛門えのびなりなり

○三月中こゝ時なれ

五月雨雲なきそ

○たなばつこゝはまこもハ杜名もこ

○うゝやうゝ六月雨生杜名る川きこゑあをこつるさ

○雪見京ハ和の紅のるこ

○橋本杜之紅葉七夕の名

○まふけの糸杜の言葉七夕きぬぎぬ糸を手向

もじめこ

○あさぎ色ハ七夕紅七夕の紅名紅の色ハひしき

物七夕のしきものこ

○庭のと杜こ六月雨庭こ七月七夕

云云庭の立ぞもこ庭しさぐるお糸つ弟

○紅葉はもし杜こ七夕こ天川のそこ先ハ五

庭の色ちたるそ

もみ名はなし

○うさこのもし杜こ天の川のそこ鶴のつこ生

ハ（どもこそ鶴おこうをこそ京をうさぎともよむ）

七夕のあらそひの会

○つもさのそし　枕　七夕まつ　年隠し　芭蕉　翁のと

○ねがひの糸そやい　七夕の命をやく　あなづるなたこ　野

いそなのそ　芭蕉　枕

○岩枕　枕　七夕のまくら　七夕　ひるの　岩まくら　つ

け　隠し　まこと　天川　つけ　し

○うぶ　ぬ　ふさ　枕　七夕の歌　うそ　彩雲　枝　を　ふ

○ふつ　ぬ　七夕　枕　まこと　名所

○枕　柳　を　ふ　ふ　ふ　おなじ　時　枕

○山風　ふ　宮殿の　ま　る　は　みい　鳥　て　は　まこと

○つき　ま　つけ　し　石　うづき　枕　宮殿　山　ふ　こと

石　うづき　つ　ふ　船　宮殿　宮　船の　見　源氏の

ますま　ふ　宮殿　宮殿　つ　宮殿　船　ふ　宮殿　伝　絵ふ

○月　船　ふ　月の　船　ふ　月の　船　ふ　ふ　し

○二　春　ふ　ふ　ふ　枕　春　を　結　ば　ま　ふ

○月　ふ　ふ　雲　ふ　ふ　枕　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ

し　ふ　ふ　ま　月　ふ　ふ　ふ

○あ　い　ひ　ふ　し　く　ハ　枕

○月　ふ　ふ　月　ふ　ふ　ふ　ふ

○ふ　ふ　ま　ハ　ふ　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ

○ふ　な　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　事

○ふ　ま　ふ　ふ　ふ　ふ　枕　ふ　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ

く　又　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ　ま　ふ

[illegible]

○[illegible]の[illegible]六時の[illegible]

○[illegible]神[illegible]一[illegible]の[illegible]正月[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]の[illegible]の事

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○[illegible]
○あつい事　[illegible]
○東雲　まこあづまめ[illegible]
○河内　[illegible]
○夏うまいふを事
○夏のうまそし[illegible]
○[illegible]
○いつまで事　[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
○[illegible]

○九重山　又加山[illegible]
○信山　大内[illegible]
○あら[illegible]
○山神　山の[illegible]
○[illegible]神　[illegible]
○神社　[illegible]
○神社をひら[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
○[illegible]
○[illegible]

[illegible]

○[illegible]

○[illegible]

○うゝこうたゝ人ゆさだまらぬ[illegible]

○わすれ子まさもゝ子ゝ[illegible]

○[illegible]

[illegible]

○東歌[illegible]

○[illegible]

[illegible]

○山うづらゝ山のなかゝくつゝきたるをうゝ

○柳のうづらゝも[illegible]

○柳[illegible]

うつまくゝを[illegible]

○[illegible]

○ほゝの[illegible]

○[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

世間はて秋の月〈おさまるまんまつらしいふる八
人のくれてるこゝ移そもなしなるそとまゝ来るそそ
ずゝどくさてさせるおのゆ〉
○夕そろきハ夕なを物おもひ四のうごくを云〉
○きもえなら西面白事〈めづらしき事〉
○ハしこれ時ハあらつきのゆををつゝ〉
○えつ風ハ都なるゝやのゝ〉
○あなしの風〈つゝ風のゝ〉
○ハゝなくハ六ハ紙なるゝ〉
○きなるなゝるまえまさおるひあなこなく〈なるゝ〉
○ひををる也〈みをる也〉ひのゝ〉ひをゝ〈ハのゝ〉ハのゝ〉
ものゝ〉

○中く　なるまぬるゝ〉
○ちるゝ　ふるゝハきゝくなるゝを云〉
○ゝゝひゝハなきけの事〉
○ゝれぬゝ〈なつゝれぬゝ〉のゝ〉
○なけのなきけハ空なるけの事〉
○まかなゝ西ハ涙なるゝ
○絶をつゝるゝ月絶まゝ心をはゝを〉
○ゝをゝ雪ハ雨の雪をゝれゝのゝ〉
○廻るゝ紙ゝのゝ〉　恋をしゝ　ゝはゝ〉
　山陰も廻るの　恋をしゝ
　ゝるゝも陰ゝ空を
○ゝるゝ　曲のゝつなゝ　さゝなゝおなゝ

○なれもとハなんぢとうふ　まくこ　ほれもとこうふ

○行なやむ　ゆきつうれたるをなり

○碓ゑ人を見るとハ　変くくてまぶりのやうまぶつと

物をゑるをいふ

○家ゑなは　絶なのことや

○きをハれとハ　尾こゑのこの男ゑ　ぬをハれめとハ　尾こゑの女ゑ

○山のふもとハ　山の陰乃ゑ

○乃のことハ　乃のうなるゑ

○永のうるはなは　ゆのこびらのゑ

○うくらとハ　百ゑ　わくらゑ

○えの葉の　神ゑ　ねしづれも　尾ゑ

○たうとうとハ　さ　生ずるゑ　たうふなり

○ハとをまれたいとハ　かうるのはいまうふ

○あなしの風なは　西風ゑ　まこうくらやも　四ゑ

○ゑ付むは　都まで　あさをはれるゑ

あなうの風ゑ　まうふ　村ゑ

○秋のむ　ゑハ　秋のさうしゑ

○雪をいとむハ　ゆきをとうふ　降ゑ　ゆきをたうひ

いとなむゑ

くもあれハ　あしみ雪　ふるゑ

雪ふるゑ　くもるのいとなるもなり

○夕雨ハ　大雪ゑ　夕ハ　夜の　ゆきゑ　降ゑ

夕武なり

大雪　夕雨ゑ　降ゑ

の

[illegible]

○梅の実物は梅花者也

○[illegible]なし　茅屋はいつらのうしろ[illegible]

○こゝなれば、物をかむるとゝ　深草の[illegible]

○うなゐ[illegible]、うなゐ[illegible]　[illegible]

○[illegible]　多[illegible]やどをさかれる[illegible]に勤れと

[illegible]

うえよりもかるゝ　勢[illegible]

○うゝ[illegible]、[illegible]を[illegible]時[illegible]

ひと[illegible]物をむくとゝ　それをうゝまれむとはいふ

○海[illegible]を焼て塩[illegible]

○[illegible]海[illegible]

杉[illegible]

○[illegible]も焼[illegible]

とゝ

雑[illegible]

上は[illegible]

○これ[illegible]

杉[illegible]

あ[illegible]

○[illegible]　[illegible]水[illegible]

○いきは[illegible]　人の魂をいふゝ

○めつらは生[illegible]十二時のうつるをいふ

おくしま八幡宮の
如何なる社殿なる
かきしるべ

○[illegible]まへ社殿[illegible]へうえ[illegible]
○[illegible]
○九の枝[illegible]
○九の巻[illegible]
○あ[illegible]
○[illegible]

こ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

賦 [illegible]
○[illegible]

賦 [illegible]
○陳[illegible]

賦 [illegible]
同 取 [illegible]
○[illegible]

文明十二年霜月廿[illegible]　宗祇左判

延寶六戊午年
五月中旬